

筆 耕

水 田 紀 久

一

懐しい「筆耕」の語も、書誌学専門の辞典などでは、かえって「筆工」の項目に束ねられるご時勢である。本屋に雇われ、写字や版下浄書に携わる仕事を筆耕と言い、かつそのような活計の徒をも同名をもつて呼ぶ。後漢の班超貧時の嘆声に発する、久しく使い慣れた語である。わが近世の儒生で、その学の浅博、才の菲英にかかわらず、この傭書筆耕を事とした員数は、まこと無量である。このたびは、筆もて硯田を耕した、むしろ博洽の士の事例二、三を顧みてみよう。

二

まず、年齢順に高芙蓉（一七三二—一八四）に登場を願う。

芙蓉は甲州出身で京都に住み、父は医者で自らもはじめ医を志したが、いつしか儒業に傾き、ついに篆刻家として名を成した。古銅印に着目して蒼古な古体風をうち樹て、印聖の誉れをほしいままにした。けれども芙蓉は、この非凡な刀技を安易に売ることではなく、知己よりの囑印には快く応えはしたが、その日常は友人や書肆のため、筆耕として力を貸し、おのれの生業としていたようである。

宝暦十二年（一七六二）京都林九兵衛・同権兵衛・風月庄左衛門三肆発行の松江藩儒桃白鹿（一七三二—一八〇一）著『世説新語補考』二巻二冊は、その題簽や袋の文字ともども、高芙蓉が版下を認めたこと、および明和二年（一七六五）京都葛西市郎兵衛（水玉堂・天王寺屋）発行の、同じく松江藩儒で在江戸の宇佐美瀧水（一七一〇

一七〇 考訂、荻生徂徠著『読荀子』四巻四冊についても、芙蓉が白鹿をわずらわせ、考訂者瀧水と出版書肆林文会堂との間を周旋していたらしいことが、白鹿宛て芙蓉書翰で判明する。以下、当該部と刻印依囑に関するくだりとを抄出する。

……然者貴著世説考、先回未全之刷板、柏店へ向相達申候処、定而御披閱与奉存候、此度全部二冊序跋共漸成候而、二冊校正本、林生〆携来候、則呈書仕候、且先回御約盟仕候通、於此地割刷失鑄等、并傍点之差等ハ、僕一本ヲ刷ラセ、乃校正候、文字誤写等御考定之葉々、一片二片〆段々早く御報被下候様二相待罷在候、此段林生も宜申上度与申候、外題文字部面之囊文字等、僕写字仕候、甚見苦候得共、林子請申候故写字仕候、

(中略)

一読荀子之一件、段々御劳心被下候而、自江都字佐美先生、天王寺屋へ、貴書到来候而、御許容被下候而、此間招牌差出候而、甚満悦仕候、万々御劳煩被下候、宜御礼申上度旨申候、
一貴印御託置、段々彫刻仕候、松江山水之句思召候ハ、早々御申越可被下候、於此地遠察仕候得共、

得与其意ヲ見聞不仕候へハ、不当之事も問候へハ、皆々全仕候而、相下し可申候、先回懸御目申候貴名貴字印いか、候哉、是又不応貴意候ハ、改鑄可仕候、急発艸々不成字候不備、

四月十三日

大島逸記(彪)

子深桃先生

三

原翰は出雲広瀬の桑原氏蔵とのことで、わたくしは写真を桃白鹿の後裔、桃裕行氏より恵まれた。また相見香雨氏は、「高芙蓉」と来禽(中)、「池大雅画譜」月報「南画研究」二巻九号(通巻十九号、池大雅特輯17)昭和33・9・1、中央公論美術出版。日本書誌学大系45(2)「相見香雨集」二昭和61・9・25、青裳堂書店刊に再録)に写真ともども紹介され、裁書年代を安永八年(一七七九)四月十三日と断じておられる。わたしは先述『世説新語補考』『読荀子』二書の刊年と書翰の記事より推して、十四、五年遡る宝暦末年頃と考える。

桃白鹿は林家昌平校出身の朱子学者であるが、養父東園は荻生徂徠高弟の太宰春台門で、この養父にも導かれた柔軟な折衷的学風で、白鹿は本藩松江藩校文明館の教

導に任じ、一方宇佐美瀧水は徂徠晩年の弟子ながら、護園八子の一人に算えられ、こちらは江戸藩邸で世子松平治郷の侍講を勤めるといふ、まさにその学風も在所も東西呼応の間柄であった。その間にあって、両書の刊行地京都在の高芙蓉は、著者や校訂者の学風如何に拘らず、著述の上梓達成のため、さながら車のこしきのように、己れを虚しうし周旋奔走に努めている。

版下筆耕のみならず、芙蓉校訂の漢籍やその模刻に成る法帖・印譜類もいろいろ知られている(水田著、日本書誌学大系43『日本篆刻史論考』昭和60・1・25、青裳堂書店)。また和文でも、寛政十二年(一八〇〇)大坂藤屋弥兵衛・河内屋太助二肆刊、木下順庵門の朱子学者新井白石著『鬼神論』の封面には「芙蓉高先生校定」とあり、その生前明和七年(一七七〇)の開版御願にも、実際に「校正者高孟彪(甲斐)」と届け出されている(享保^{享保以後}大阪出版書籍目録)。孟彪とは芙蓉の名である。もとより、その身上である篆芸はもっともおしみつつも、不党不偏、如上の版下書きや校訂の所業に碎身した芙蓉の面目こそ、まさに筆耕者の真骨頂を見る思いである。

四

国書と漢籍とを問わず、学統学派に拘らず、傭書に徹した浪華の代表的筆耕高安蘆屋(一七九二、三一寛政四、五年歿か(浪速人傑談))をつぎに迎えよう。蘆屋は浪華住であったが、さきの高芙蓉とも面識があつたらしく、その著『有斐齋劄記』(内閣文庫蔵)第一で「友高孺皮言」云々と呼んでいる。孺皮とは芙蓉の字である。蘆屋のことは、頼山陽の父頼春水(一七四六―一八一六)の在坂(撰津)追想記『在津紀事』に詳らかである。本書は春水が二十歳過ぎから多感な十六年間(一七六六―八一)浪華に在って混沌詩社に参じ、社中の後輩として周旋に努めた想い出を、後年文化七年(一八一〇)にまとめさせた断章の花束で、壮時の回想は徐ろに昇華し、当時の結社活動の実態を如実に伝える好個の文字となっている。蘆屋に関する二章のはじめに、その筆耕活動に触れ、

高莊二郎流蕩落魄、傭書為_レ生、戲草・源語梯・及入江昌喜^{稱半}著述、皆係_二高生書、初書法俗陋、余家藏_二渡辺素平書一軸、借与摸_レ之、書法一変、常称_二余徳、(下卷十二丁表)

と、その版下になるといふ国書名が列举されている。

最初に挙げられた「戲草」は寛政元年（一七八九）刊
雨森芳洲（二六六八—一七五五）著平がな随筆『たはれぐ
さ』三卷三冊である。以下、天明四年（一七八四）刊五
井純禎（蘭洲一六九七—一七六二）著『源語梯』三卷三冊、
入江昌喜（一七三二—一八〇〇）関係の安永三年（一七七
四）刊『幽遠随筆』二卷二冊（絶版）、安永八年（一七七
九）刊『青陽唱詠』一卷一冊、天明四年（一七八四）刊
『久保之取蛇尾』三卷三冊、同年刊『竹取物語抄』二卷
二冊（小山儀著、昌喜校）、寛政五年（一七九三）刊『異名
分類抄』四卷一冊などがそれに当たる。

五

蘆屋については、森銑三氏が詳しく調べられ（「高安蘆
屋」、『新橋の狸先生』昭和17・5・20、二見書房刊所収。「高
安蘆屋遺事」とともに『森銑三著作集』第四卷人物篇四、昭和
46・8・25、中央公論社刊に再録）、その版下に成る書も、
右のほか安永六年（一七七七）刊加藤字万伎著『雨夜物
語だみことば』二卷二冊、天明元年（一七八二）刊稲葉
通龍著『装剣奇賞』七卷七冊、天明三年（一七八三）刊
『鬼貫発句集』二冊、天明五年（一七八五）刊生白堂行
風編狂歌集改編『後撰夷曲集』三冊、稲葉通龍補正『鮫

皮精義』二冊、同『更紗図譜』一冊、橘国雄著『挹芳齋
雑画』三冊、天明六年（一七八六）序寛政七年（一七九
五）刊富士谷成章著『非なるべし』二冊、天明年間刊五
升庵蝶夢著『遠江の記』一冊、寛政十年（一七九八）刊
橘南谿著『西遊記統編』五冊など、いずれも版下は蘆屋
の筆というのが森氏の見解である。かつ、『挹芳齋雑画』
上巻の「雑画図意」なる一文は、版下のみでなく文章そ
のものも、「一種のとほけた味」から芦屋作かと森氏は
説かれる。版下書きが專業のはずの筆耕としては、確か
に分を越えた挙に違いないが、所詮それも才の然らしむ
る所業であろうか。

蘆屋筆版下の美しさは、『久保之取蛇尾』と『たはれ
ぐさ』に極まる。その印象を森氏は、「その書、硬に失
せず、軟に墮せず、品格もあり、飄逸の趣もあり、細字
ながら感じがゆつたりしてゐて、何ともいへぬ気持のよ
さを持つてゐる」と評される。まこと、適評である。そ
こで本稿では、かの頼春水も高安蘆屋版下本の筆頭に数
えあげた「戲草」、すなわち雨森芳洲の平がな随筆『た
はれぐさ』の版本について、いささか閑説したい。

『たはれぐさ』上中下三巻三冊は著者雨森芳洲歿後三十四年後の寛政元年（一七八九）己酉秋九月、大坂心齋橋筋南久宝寺町高橋平助・同心斎橋筋南久太郎町高橋喜助二肆より初版発刊、そのまた三十六年後の文政八年（一八二五）乙酉四月、四都四肆、尾張永楽屋藤四郎・江戸大坂屋茂吉・京都吉野屋仁兵衛・大阪藤屋善七から初版と同一版木で再刊された。「たわれ草 三冊」の出願は発刊五年前の天明四年（一七八四）二月、許可は同三月五日で、「作者 雨森東五郎（対州）、板元 塩屋平助（南久太郎町六丁目）」とある（享保以後大阪出版書籍目録）。ところが、板元塩屋平助の住所は初版刊記では南久宝寺町に移り、南久太郎町は連名の同喜助のそれに代わっている。

これより前、同じ著者の漢文随筆『橘窓茶話』上中下三冊が、『たはれぐさ』の出願二年後、発刊三年前の天明六年（一七八六）丙午五月に、浪華の儒者篠崎三島（一七三七—一八一三）の校訂で三都四肆より発刊されているが、うち大坂の二肆は「大阪心齋橋筋南久宝寺町高橋平助・同心斎橋筋南久太郎町同喜助」である。併せて

裏表紙見返しに「興文堂発行書目、大阪心齋橋筋南久宝寺町高橋平助」として、橘窓茶話三冊・たはれ艸三冊・春秋左氏捷覧三冊・源語梯三冊（以上出来）・和訓集覧五冊（近刻）の広告が掲げられている。この時、興文堂高橋平助はすでに南久太郎町より南先隣の町筋、南久宝寺町に移っていたことが判る。因みに、この『橘窓茶話』の出願は、先ず初編一冊が安永八年（一七七九）四月、続編二冊丁数七十二丁が翌安永九年（一七八〇）五月十四日になされ、同六月六日許可されている。こうして上中下三冊として三都四肆名で上梓されたのが、先述天明六年五月であるが、当然、出願時の板元塩屋平助の住所は、まだ「南久宝寺町六丁目」である。なお、出願の続編二冊が刊本の中下巻に相当することが、その丁数の合計よりも推測される。

興文堂塩屋こと高橋平助の広告にある『源語梯』三冊の版下は、先に述べたように、この『たはれぐさ』版下と同筆の高安蘆屋である。いま試みに、校合者、作者、筆者また双鉤者としての蘆屋の住所を、『享保以後大阪出版書籍目録』でたどってみると、出願時に届けられた町村名は、はじめ『浪速人傑談』に「中年の後難波村に移りて、専ら書耕して食衣に供せられしとかや」と見える通り、

安永五年（一七七六）が難波村、同六年（一七七七）には、道頓堀を越えて島之内の木挽北町とあるが、次第に北に移り、翌七年（一七七八）から十年（一七八一）にかけては、長堀をも越えて南船場の安堂寺町五丁目に住んでいる。その間、南久太郎町六丁目塩屋平助よりの出願が多く、御池通六丁目和泉屋文助、銚屋町河内屋茂兵衛の所用がそれに次ぐ。蘆屋はさらに北を指し、天明四年（一七八四）には南久太郎町四丁目に移っており、南久太郎町六丁目塩屋喜助出願の『行成卿仮名帖』一冊の双鉤人として届けられている。『たはれぐさ』の版下に流麗な筆を執ったのも、この頃であろう。天明八年（一七八八）には一時北平野町九丁目とあるが、寛政二年（一七九〇）には更に本町四丁目へと徙り、以後は蘆屋歿後の出願記録として、「故人」と肩書きが付されるにとどまる。おそらく寛政二年後、数年を出でずして、この代表的筆耕は世を去ったと思われる。

七

高安蘆屋、名は昶、字は載陽、通称を莊次郎（庄二郎・庄次郎）という。少年の頃には柳沢淇園（一七〇四—一七八）に愛されたと伝える（『近世畸遊伝』）。学系はよく

判らないが、浪華に徂徠学を伝えた菅甘谷（一六九〇—一七六四）晩年の門弟として（『甘谷先生遺稿』に「門人高載陽写」とあり）、数か年従学の後、師の歿後はこの地の学問所で朱子学を宗とする懷徳堂の中井竹山（一七三〇—一八〇四）に入門したとも推測される（石井研堂蔵『和漢年契』佐藤一斎識語。先掲森銑三「高安蘆屋」引）。懷徳堂の学風には主流である漢字のほか和学の流れがあり、もし堂に入門していれば、和学をも兼ね修める機会を持ったことになる。また、入江昌喜と親しかつたことは、斯学の知識涵養に少なからず役立ったであろう。『在津紀事』が伝える、頼春水蔵の渡辺素平の一軸に、自得開眼したかな書の手技も、また漸く格を出すまでに上達したのである。

懇意な書肆塩屋興文堂高橋平助が、雨森芳洲の漢文隨筆『橘窓茶話』にひきつづき、これもそれまで写本でのみ伝わっていた芳洲の平がな隨筆『たはれぐさ』を上梓するに際し、筆耕を依頼された芦屋は、漸く円熟の域に達したかな書きの技量を、非凡な作品内容と適抜な文章を前にして、いやが上にも奮い立たせずにはおかなかつたと思われる。腕に繕りをかけたその版下の出来映えが、とりわけ出色であったのも、よく領ける。

名筆耕高安蘆屋は、しかしながらその運筆の中途にして、ついに切れて本音を吐いてしまった。版本『たはれぐさ』中巻二十一丁表、対馬の亀ト神事に関する段で、ただ一か所、はっきりと版下書きの立場で、著者のト辞名称の説明に対する批判のコメントを、片かな文一字下げで挿記した。もとより、版本以前の旧写本には、この一文は見当たらず、版本でも他の章段では絶えて見かけない、希有な筆耕所見である。

私云、依女ノ依ハ、えノ仮名、笑ハゑミノ仮名ナリ、モシコノ吐普加身依女ノ文字、上代ヨリカク書きキルナランニハ、笑ノ説、穩ナラザルニ似タリ、凡古事記万葉集等ハ勿論、順ノ和名鈔撰セラレシ頃マデノ書ヲ見ルニ、仮名ヲ用ル事甚ダ正シクシテ、ミタリニ其義ヲ誤ル事ナシ、故ニ今清書スルニ、前二ハえノ仮名ヲ用ヒ、後ニハ笑ノ義ト説ルヲ以テ、ゑノ仮名ヲ用ヒタリ、此書ヲ清書スルニ、カ、ル事尚少カラズ、見ル人此ノコ、ロヲエテ、見玉ハン事ヲコソ、

和学の心得もあつた蘆屋は、この芳洲の平がな隨筆を

「清書スル」に当たり、己れの仮名遣いの知識と違う個所に会うたびに、これと同様の思いを繰り返したに相違ない。自負の学識に触れる積り積つたマグマが、ここに到つて筆耕の埒を越え、到底黙視するに忍びず、片かなの一文となつて噴出したと解される。

九

それにつき、蘆屋は『たはれぐさ』の書名をどのよう
に解していたのであろうか。先引、頼春水の『在津紀事』では「戲草」の字を当てている。確かに「たはれぐさ」と聞けば、一般にたわむれに作つた草子の意に受け取る。芳洲在世の頃の浮世草子、都の錦作『元禄大平記』（元禄十五年（一七〇二）刊）五の三話「是から末は学問のみち」の、

それ四書五経しよきやうをはじめ、大和書かみかきのたはれ草ぐさにいたるまで、梓あつぎの数年かず々にひろがり、

という用例が、『日本国語大辞典』に引かれている。代表的漢籍をはじめ、かな書きの娯楽的冊子まで、出版が年ごとに増える意である。また、同じ頃の撰津伊丹の俳人鬼貫の『仏兄ぶとえ七久留萬』上、夏の部正徳二年（一七一二）の作中にも、

螢の巻を書たる絵に讚

物いはぬ螢や袖のたはれぐさ

の句がある旨、名古屋大学の塩村耕氏より垂教にあずかった。『源氏物語』を和語和文の戯れ書きとした上での句作りである。一方、「たはれぐさ」はよもぎの異名として、『日本国語大辞典』には『新撰六帖題和歌』の六帖より、藤原信実の、

冬しけの霜をいたたくつくもがみ見えしすぢなきたはれ草哉

の一首を引く。「冬の草」の部の四首目だから信実の歌で、鎌倉期の作例である。万治三年（一六六〇）刊の大本や、続々群書類従十四所収形では、濁点がすべて省かれる。『国歌大観』には第一句が「冬しけの」とあり、濁点を施す原則なら、この形が妥当であろう。それはともかく、普通名詞、固有名詞の別を問わず、「たはれぐさ」は頼春水が充てたように、「戯草」と解するのが一般であろう。

十

ところが、『たはれぐさ』の著者雨森芳洲は、本書のことを「狂草」と書き記している。寛保四年（一七四四）七十七歳時に認めた漢文跋や、延享三年（一七四六）八月十五日付け桂洲道倫宛て書翰（塩村耕氏蔵）がそれである（塩村耕「雨森芳洲と『たはれ草』」、森川昭編『近世文

学論輯』一九九三、和泉書院刊所収）。また、同書の九十二段に見える「たはれたる人、またはさけにえひたるもの」の用語例も、芳洲は狂人と酔っ払いの意味に用いている。ただふざけている人の意ではない。また、狂歌の狂でもない。

何よりも、本書の自序に相当する第一段冒頭の言、「たはれたるもの、ことも、かしこき人ハえらふといへるをたよりとし」云々という、著者自ら書名の由来を表明した開口の言に注目しなければならない。それは自序の形通り、謙辞を陳ねているのであるが、その出典が『史記』淮陰侯伝、およびそれを承けた『漢書』韓信伝の、「狂夫之言、聖人扱焉」（氣違い男のたわごとでも、聖人はそれを選び生かす意。漢の將軍韓信から戦略を問われた虜將広武君李左車が、その返答に引用した語）である事実¹に想い到れば、著者の言う「たはる」は戯る意とは同音異義に用いられていることが判明する。近世前期、芳洲の頃には、このような混用が行われていたのであるろうか。

十一

『たはれぐさ』の著者雨森芳洲は己れを「たはれたるもの」、実は「たぶれたるもの」、すなわち狂人に擬え、

あえて児孫への庭訓に托し、ひろく文物世教への提言の数々を開陳したのである。気ままな屈託ない書き散らしたの営みを「あやしうこそものぐるほしけれ」とへり下つたのは、つとに著者が範とした『つれづれぐさ』の作者兼好であったが、本書の「たはれたるもの」は出典との対応より見ても、最初より社会理性喪失の狂人を意味し、単なる遊びごころの玩弄者、陶醉者、燃焼者などの逆接表現では、決して有り得ない。流麗な筆を揮い、本書の版下筆耕に出精した挙句、本文の仮名遣いには異を唱えた蘆屋ではあつたが、この書名の由来をどこまで読み取っていたであろうか。儒学者の頼春水ですら、所詮「戯草」止まりの漢字変換に終っていただけに、和学通の蘆屋ではあるが、やや心許無さが残るのである。

十二

高芙蓉も高安蘆屋も、偶々ともに高氏を名乗るが、芙蓉は郷里「甲斐高梨」(大典撰墓碑銘)の高、蘆屋は姓を修したにすぎない。もつとも芙蓉の場合、実地に甲斐の何処を指すのか曖昧である。『先哲叢談』続編巻之十高芙蓉の項に、「祖父……居^三甲斐高梨郡名取邑」とあるが、甲州に高梨郡という郡名は無い。ただ同じく甲州は

中巨摩郡に名取という字(現竜王町名取)があり、ここから裏富士を仰ぐと、門弟杜俊民自筆『印道諸家確論』(水田蔵、『文藝論叢』第32号、平成1・3・17、大谷大學文藝學會発行に縮影紹介)の、「先生ノ生国ハ甲州ニテ、甲州ヨリ富士ハ前ニ連山有之、富士ノ峯斗リ見へ、^①如斯黒駒山ニ隔ラレ、ツホミノヤウニ見ル事ユエ、先生則号トセラレタリ」という、世芙蓉「菡萏居」の謂れとも見事に吻合する。竜王町はまた、明和事件の軍学者山県大貳(一七二五―一六七)の出身地として、芙蓉が源発・明発、高籍・士典、高鶴瑞・堯侯、近藤齋宮、大島逸記などと、しばしば姓名を易えたことも関連があるので、と勘繰りたくもなる。

高安蘆屋の家は浪華雑喉場の富豪であつたという(浪速人傑談『近世畸遊伝』)。ただ、上述の傭書家業は難波村を振り出しに、島之内、船場と鶉居同然の生涯であつたと想像される。郷貫の確たる証定を欠く高芙蓉は、命終の日も二、三の説に分かれはするものの、それでも京都東山区浄土宗捨世派一心院に生前当人が建てた寿蔵碑が、また東京港区芝西久保巴町浄土宗光明山天徳寺に、立派な墓碑銘(大典撰、韓天寿書、橘茂喬へ初世浜村蔵六)建、池大雅題字、稲毛屋山集字、台石追記、稲毛屋山識、息恭

斎書、羽倉太冲識）が厳存する。かたや高安蘆屋は歿年すら不明で、その墳墓も杳として知れない。不幸は身後に極まったと言えよう。

十三

高芙蓉と高安蘆屋という、京阪の代表的二筆耕を拉し終えた今、さらに一人、「高」にゆかりある「岡」「丘」と修姓の丘思純こと岡本遜齋（生歿未詳）を巻軸に据える。この第三の筆耕は居住地では芙蓉と等しく、同じ著者の書物に関った点では蘆屋と有縁であった。蘆屋は雨森芳洲の和文随筆『たはれぐさ』の版下を揮洒し、遜齋は芳洲の漢文を集め、『橘窓文集』を編んだ。もつとも、遜齋はもっぱら編纂校訂を事とし、序を冠しているが、筆耕作業に携ったかどうかは不明で、版下書きが主な備書稼業とは自ずと異なりはするが、知友や書肆の依頼に応え、他人の著述上梓に力を貸した点では、筆耕蘆屋と大同である。

丘思純、名は思純、字は守心、号は遜齋、通称正吉。岡本また丘本氏をもって丘氏を称した。『平安人物志』天明二年（一七八二）版、学者の部に載り、住所は「岩上弘光寺上ル町」とある。後年、田能村竹田（一七七七

一八三五）は『屠赤瑣瑣録』（文政十二年（一八二九）成）巻二、五、六などに、畏敬の筆もてその人柄を語っている（水田稿「丘思純と紀惟徳」、『文藝論叢』第14号、昭和55・3・3、大谷大學文藝學會。『近世日本漢文學史論考』、昭和62・1・1、汲古書院刊に再録）。竹田の言によると、遜齋の住まいは千本通錦小路で医を業とし、隱居講学、堀南湖の学脈を伝え、経史のほか天文地理小説等にも精しく、詩文も巧みであったが、閑居屏息し跡を晦ますゆえ、世に知られていない由である。葬所等の記録すら無い。

岡本遜齋は雨森芳洲の『橘窓文集』二卷二冊を編纂し、寛政六年（一七九四）十月、京都の斎藤莊兵衛・大塚善兵衛・吉田新兵衛三肆より上梓し、その由来を記した編者の序は、義弟の書家紀惟徳（白井元蔵）に筆を執らせている。文中、遜齋は木門十哲の一人芳洲との縁故を、「余也沿于木門末派」と、同じく京学系、木下順庵の学統に連なる事実に求めている。遜齋の師筋堀南湖は木下順庵の外孫に当たる。また田能村竹田は同臭の雅儒村瀬栲亭と、かねて崇敬するこの隱儒遜齋にも、わが会心の編著『填詞図譜』二卷二冊（文化三年刊）の序を嘱した。文化二年（一八〇五）秋九月、遜齋は本書に序し、同冬十一月には故実家橋本経亮（一七六〇—一八〇六）の

『梅窓筆記』二卷二冊（文化三年刊）にも序を贈っている。

十四

これより早く、岡本遜齋は寛政二年（一七九〇）春二月、再版本の『心学文集』巻頭に題言を冠している。本書はつとに元禄二年（一六八九）刊行された陽明学の中江藤樹・熊沢蕃山著『儒生雜記』五卷五冊の改題本で、四都五肆より発刊された刊記にも、「元禄二年己巳原刻寛政元年己酉再板」と断つてある。実に一世紀前の版本（大塚屋清兵衛開板）である。発行書肆よりこの再版改題本の校訂を依頼された遜齋は、「如_レ其_レ學術、余別有_レ論、不_レ贅_三于此、寛政庚戌春二月 平安丘思純識」と結びながら、文中、「今也欲_レ訂_レ之、無_レ復_レ文獻可_レ徵矣、余嘗藏_三藤樹文集、戊申之災、雖_レ屬_三烏有、披覽之熟、彷彿記_レ之、因_レ此推_レ之……」云々と、所収作品の著者の識別が明確でなくとも、内容がら藤樹、蕃山両先生のいずれかの著述に違いない旨を述べ、それを朱子に於け

る『二程遺書』『二程外書』編集との関係に擬えている。

昔者晦翁采_三録二程之語、汎稱_三程子、不_三復識別、盖以_三其道同_一論合也、夫蕃山之於_三藤樹、出処雖_レ異淵源寔同、何必費_三分疏於其間_一哉、

校訂者岡本遜齋は、学系よりすれば当然程朱学派であるが、その己れを信頼してくれる書肆からの依頼であれば、ましてこのすぐれた陽明学の先学の著述校訂であれば、諾するのに吝かではなかったらしく、題言には正直に経緯とその立場とを記述している。一切内容にわたらず、只管本文に忠実であるべき版下筆耕であれば、もとより言うまでもないが、校訂者贈序者であつても、この遜齋に見られるように、一々著者の学統に拘つては居られないのが現実というものであろうか。本書の発行は、題言の年記より考えて、実際には寛政二年以後であろう。それにしても、高芙蓉、高安蘆屋、そして岡本遜齋がともに、精粗の差こそあれ、伝状の細部に不明の部分を残しているのも、思えば悲しい暗合であらう。

（大谷大学講師）